

ヤングケアラーに対する配食支援事業の 実施状況について

(集計期間：令和4年10月～令和6年1月)

ヤングケアラーに対する配食支援事業の実施状況について①

- 令和4年10月から令和6年1月末まで16ヶ月間の実績は117世帯。（兵庫県60世帯、神戸市57世帯）
- 配食事業の対象となったヤングケアラーは、小学生と中学生が最も多くなっている。

1 対象者の住所

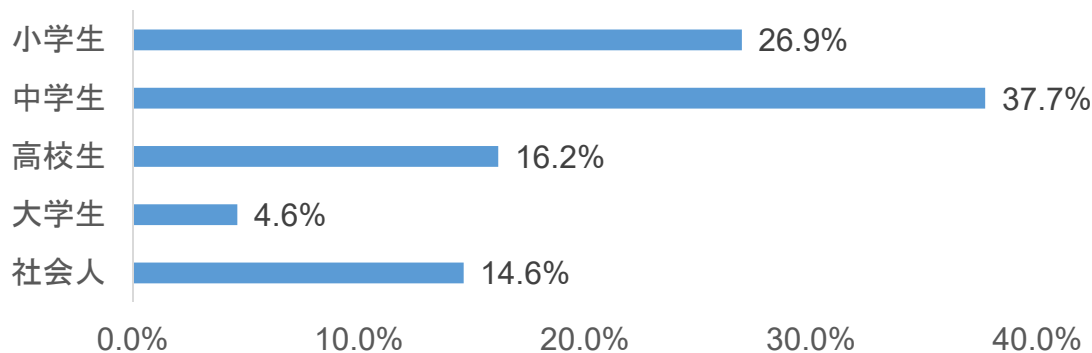
○県窓口60世帯の内訳

市 町	世帯数	市 町	世帯数
尼崎市	7	姫路市	6
西宮市	2	市川町	2
芦屋市	2	赤穂市	1
伊丹市	4	太子町	1
川西市	4	養父市	8
明石市	5	朝来市	2
加古川市	1	新温泉町	2
高砂市	2	丹波市	2
稲美町	1	洲本市	1
加西市	1	南あわじ市	2
加東市	4		
		合計	60

○神戸市窓口57世帯の内訳

区	世帯数
東灘区	5
灘区	0
中央区	10
兵庫区	6
北区	6
長田区	8
須磨区	1
北須磨支所	3
垂水区	12
西区	6
合計	57

2 ヤングケアラーの状況（複数回答）



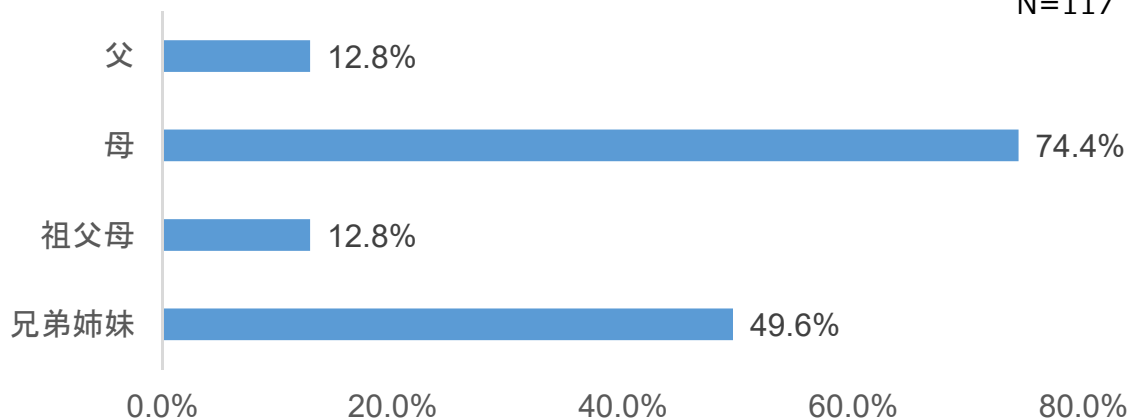
年 代	人 数
小学生	35
中学生	49
高校生	21
大学生	6
社会人	19
合計	130

ヤングケアラーに対する配食支援事業の実施状況について②

- ヤングケアラーのケアの相手については、母が最も多く、次いで兄弟姉妹となっている。
- 世帯人数では、2人世帯が最も多いが、それ以上の多人数世帯も大きな偏在なく分散している。
- 配食開始時期は、事業がスタート直後の11月が最も多く、年度またぎ時に減少している。

3 ケアの相手（複数回答）

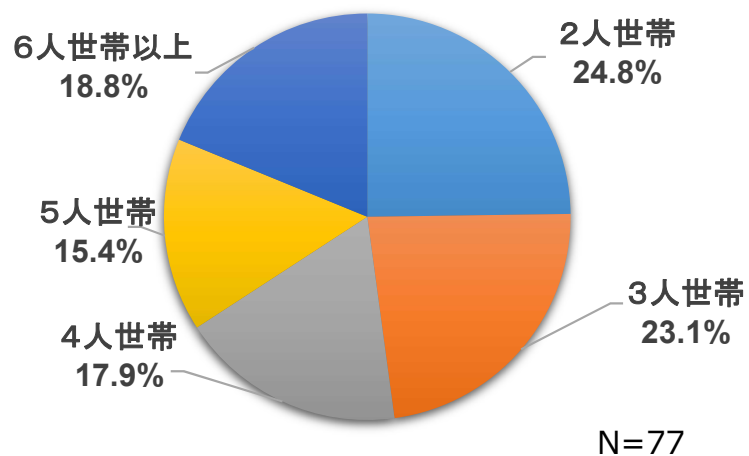
N=117



項目	人数
父	15
母	87
祖父母	15
兄弟姉妹	58

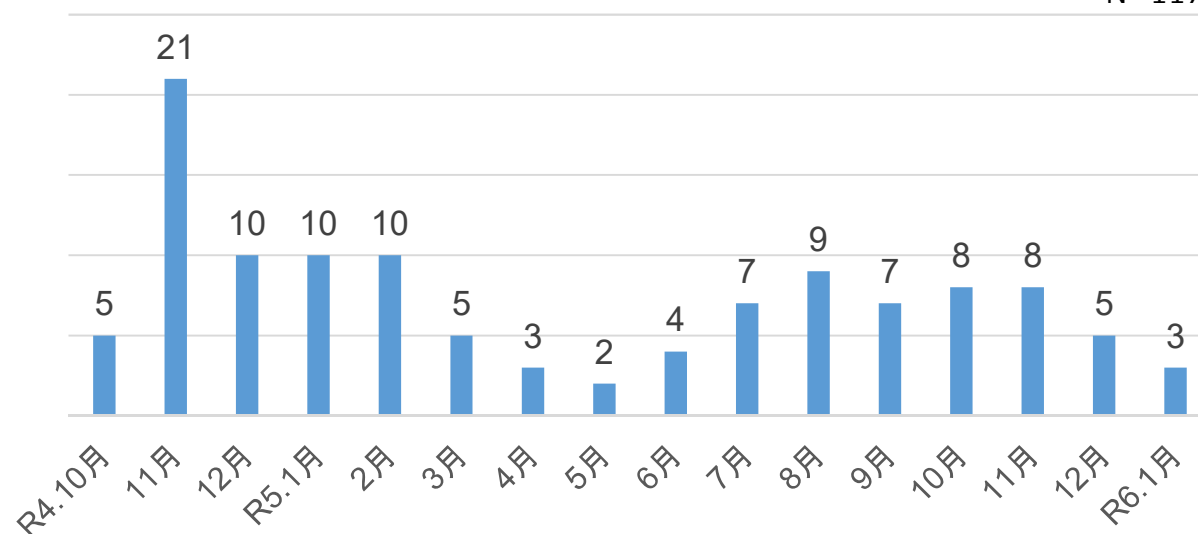
4 世帯人数

N=117



5 配食開始時期

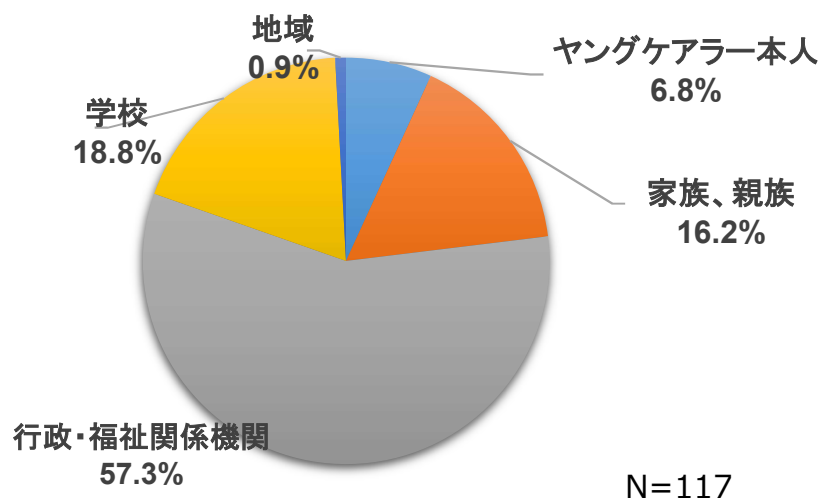
N=117



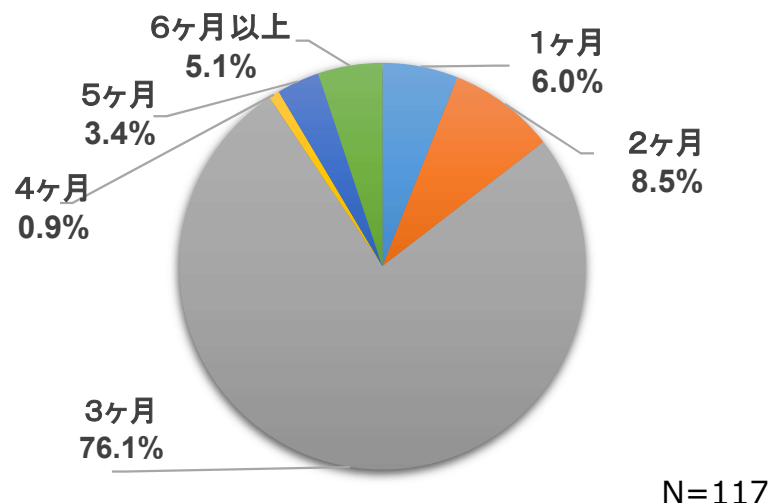
ヤングケアラーに対する配食支援事業の実施状況について③

- 配食事業の利用のきっかけについては、行政・福祉関係機関からの連絡が半数を占め、次いで学校からの連絡が多い。ヤングケアラー本人や家族からの連絡は少ない。
- 配食期間については、3ヶ月が最も多いものの、ヤングケアラーの状況によって6ヶ月に延長している場合も数件ある。

6 配食事業利用のきっかけ（相談者）



7 配食期間（予定も含む）



8 配食期間を短縮した主な理由

- ケア対象者・ケアラーともに施設入所となったため
- イスラム教の家族であり、ハラール食材でなかったため
- 市外転居のため、1か月半の利用で終了
- ヤングケアラーが一時保護となり、自宅にいなくなったため途中終了。

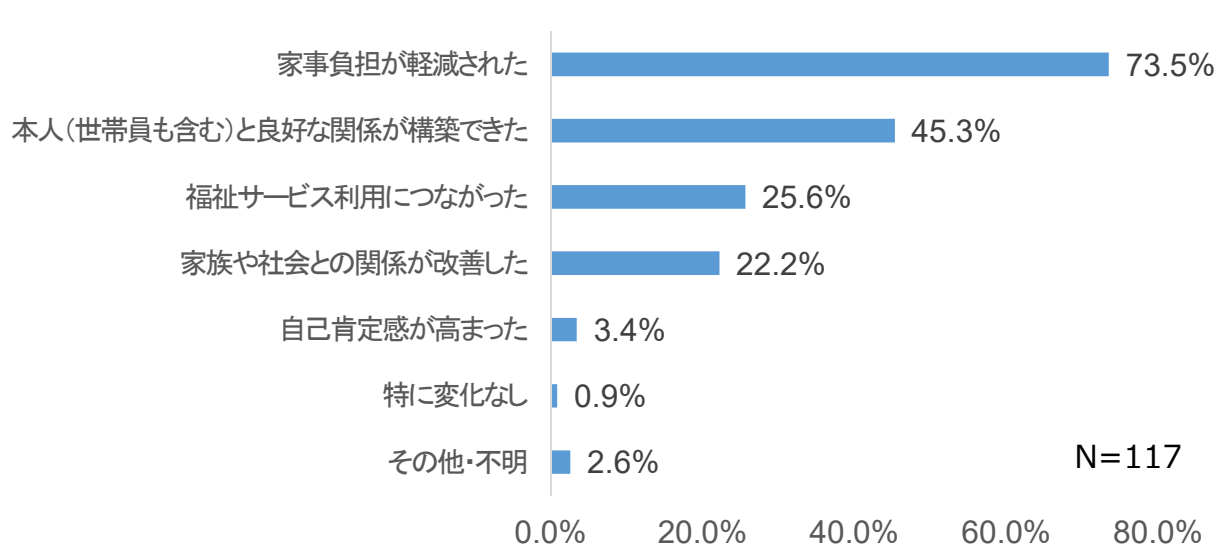
9 配食期間を延長した主な理由

- ケアラーの自立までにもう少し時間が必要なため
- ケア対象者の支援の方向性が決まるまでに時間を要するため
- 3か月では福祉サービスの調整が困難で、さらに調整に係る期間が必要となったため
- 通院を拒んでいたケア対象者が通院を受け入れ、状況が好転し始め、安定した状況までの支援として延長を実施。

ヤングケアラーに対する配食支援事業の実施状況について④

- 配食後のステップアップの状況（ヤングケアラー等の状態像の変化）については、家事負担の軽減が最も多く、次いで、本人との良好な関係の構築、福祉サービスの利用につながったとの回答が多くなっている。

10 配食支援後のステップアップの状況（ヤングケアラー等の状態像の変化）（複数回答）



項目	人数
家事負担が軽減された	86
本人（世帯員も含む）と良好な関係が構築できた	53
福祉サービス利用につながった	30
家族や社会との関係が改善した	26
自己肯定感が高まった	4
変化なし	1
その他・不明	3

11 その他状態像の変化

- ご飯づくりの一連の負担感が減って助かった。
- 支援者(学校関係者)がヤングケアラーとして様子を気にしてくれるようになった。
- 体調がよくなった。（検査値が正常になった）
- 不登校気味だったが登校できるようになった。
- 無職だった両親が仕事についた。
- 電話のみのつながりだった世帯に配食をきっかけに訪問ができ、家族や本人と顔を合わせる関係となった。
- ひきこもりがちな世帯に配食サービスをきっかけに訪問支援事業につながられた。
- 不登校の為、学校との関係があまり良くなかったが、学校が母の疾患に気づき、対応に変化が見られ良好な関係となった。

ヤングケアラーに対する配食支援事業の実施状況について⑤

12 家族・関係者からの声

- 家族との関係がよくなり、新たな支援などを提案し、受け入れてもらえた。（支援者）
- ケアラーである子どもは喜んでいるが、親には特に効果は感じてもらえていない。（支援者）
- 大半(特に保護者)の方は助かっていると話されるが、そこから1歩前に進むのに躊躇している感じがする。
- 支援者の会議において、こどもは助かっているが、親のパワーレスになってしまっているのではないかという声もあった。
- 家事負担が軽減された。家族でゆっくりする時間を持てた。学校の長期休み期間の配食が助かった。
- 外国籍のケースで、教育や社会福祉のサービスにつながるきっかけになった。
- 冷凍庫が壊れていて、お弁当を腐らせていた。家庭がそのような状況であることが今まで分からなかった。
- 家族に配食を紹介する際、確実に配食してもらえないならいいが、色々と家庭の状況を聞いてから結局ダメですと言われたら、家族との関係性がこじれる可能性がある。（支援者）
- 美味しく、子どもたちが嫌いな野菜を食べることができた（母談）
- お弁当が美味しく、きょうだい喜んだ（本人談）
ご飯を炊く回数が減った（母・本人談）
- 配食日には夕食の準備をしなくてよいと思うだけで、気持ちが軽くなって落ちついて過ごせた。
- 子どもだけでも食べることができるので良かった。
- 家族が多いので、配食のある日は他の仕事や用事ができて助かった。
- 献立を考える回数が減り助かった。
- 買い物や食事を作らなくて良いと思うと気持ちが楽になった。
- こどもの負担が少しでも減って助かった。
- 週に1回でもお弁当があると思うと気が楽になった。
- 生活費もギリギリなので、経済的にも助かった。
- 母親にゆとりができた結果、子どもに用事のお願いやきつい言い方をすることが減り、助かっている。